

令和に結ばれた縁の糸

西松 布咏

早いものであと僅かで今年も過ぎようとしている。もうそろそろゆっくりと日々を重ねて行きたいと思うと同時に後悔しない人生を終えたいという想いが交錯する今日この頃である。幸いな事に白内障からくる視覚の不自由さを除けば至って元気で精進したいという上昇志向は日々持続している。

昨年は嵐の中、美紗の会名取連による「己紗の聲」の会が船出し稽古場設立から四十八年を迎えておほろにはあるが道筋が見えて来た様な気がしてきたので、私の今年の目標は今迄習得した多くの曲を録音して残して行くことだった。

四年前に那須高原の麓にある妹の別荘の前の土地に小さな家を建て口フトに録音スペースを設け、時間を作っては高速バスで通っている。歳と共に声の衰えを感じ始めてからのライフワークである。

そして今年はいよいよ北海道でのコンサートが実現した。今から二十四年前新宿ピットインでジョンソルト氏の出版記念コンサートに出演した時に知り合ったビデオグラファターの宮崎利春氏と時折交わすメールに「たまには北海道に遊びにいらっしやいませんか？」とお誘いがあったので「コンサートを作ってくださいたら三味線と伺います」と答えると早速九月二十八日に千歳の有名な寿司店の座敷での「九月の陽炎に唄ふ」会を企画して下さった。

北海道は大学生の夏休みにリュックを背負って友達と気ままな旅以来だったのでその気分を思い出しながら旅発つた。新千歳空港から宮崎さんの車で向陽台のスタジオへ真っ直ぐ続く道の両側は早くも紅葉した木々が点在し遙々北国に到着したと心が躍った。翌日のコンサートは「夕暮れ」から始まり吉原の世界を描いた新内小唄や端唄そしてコミックな「キリギリス」や秋の唄をしみじみと唄い、谷川俊太郎の詩を創作した「九月の唄」で終演した。

そして地元の方々と美味しいお寿司やお酒を酌み交わす楽しい宴会となった。店を出るとひんやりとした風が頬に心地良く江戸の闇の様な千歳の街にほんのりと灯る店に案内された。民謡歌手のご夫婦のステージ付きのバーでスコップ三味線の共演にやんやの拍手をしたり久しぶりのカラオケで更けゆく夜を愉しませていただいた。

翌日は「これから大自然の北海道をご案内しましょう」と車で朝陽にきらきらと耀く支笏湖を巡り空港に送ってくださる途中で車を止め、青空の広がるキャンパスにゴッホの絵の様な向日葵の丘をプレゼントして下さった。

青春の過ぎし思い出の北海道がご縁の糸のお陰で懐かしく蘇る楽しい旅となった。

もう一つのご縁の糸が繋がったのは十一月三日の文化の日だった。

とある日に「まだか富士見台メディアカルホームから「田中正大さんをご存知でいらっしやいますか？」と電話をいただいた。遙か昔まだ私が師匠の駆け出しの頃の弟子だと答えると「四年前に誤嚥性肺炎を繰り返し食事が困難になり当ホームにお入りになりもう寝た切りで意識もおぼろげなのですが部屋に置いてある三味線の話をすると思いい出したように反応なさるので、もし可能でしたら演奏に来てい



ただけませんか？」とのことだった。早速田中さんご紹介下さった小高こと忠咏さんに相談し、山中こと幸咏さんと三人連れだつてホームの文化祭に伺った。

演奏会場の舞台の一番前にベットに寝ている田中さんとまさに四十数年以来のご対面である。小学校の教師を全うし敬虔なクリスチャンであられ師匠としてまだ未熟だった私をたしなめて下さったこともあった精悍な頃の於母影が甦り目頭が熱くなりそっと手を握りしめた。邦楽界の美空ひばりと言われている西松布咏さんです！とご紹介にびっくりしな



からウキウキするような陽気な唄「並木駒形」「文弥くずし」「待てというなら」「キリギリス」をお喋りをしながら演奏し、続けて幸詠さんが「夢の柳橋」忠詠さんが「勝名のり」を声高らかに唄った。その後も厭きてしまわれないかと懸念をしながら「芝で生まれて」「芒担いだ河太郎や」「神田祭」と続けたが、田中さんは、じっと聴き入りながら眼に涙をいっぱい溜め、椅子に座っている方々は楽しげに身体を左右に揺らしながら聴き入って下さった。

のちに田中さんの担当者が、演奏を聴いた後、今まで何もしなかった入居者が洗濯物を自ら畳まれ「私も何かしなきゃ、生きなきゃ！」とその方が出来る精一杯をして下さいました。まさに音楽が生きる力に変わった瞬間で、とても感動しました」とメールを下さり、嬉しく思った。三味線のお陰で私の方こそ生きる喜び、唄い続けてゆく希望を頂いた縁の糸であった。

美紗の会の弟子達は女優業、デザイン界、医師界、マスコミ業界、IT業界、教師とそれぞれのプロが多く、忙しい本業の傍ら懸命に三味線音楽と取り組み生き生きと活躍しており、私の方が色々な意味で刺激とエネルギーを戴きながらの稽古が続いている。

十一月十六日の「美紗の会のつどい」を終えて、しばらく手がつかなかった自分の稽古と録音をしに那須に行つた。一日中三味線三昧の後の眠れぬ夜に、ふと枕元に置いた松岡正剛氏の「芸と道」のページをめくっていると、千夜千冊の「黒御簾音楽」の中の「十年ほど前から三味線の師匠を紹介して欲しい」と言われると迷わず西松布詠師を紹介することにしている・・・との一節にぶつかり、叫びたいほど何とも言えぬ幸福感が静かな闇に広がっていった。

これからの大切な時間をどう生きて行くべきかを確信した晩秋の夜だった。



## 素敵な出逢いに感謝

高橋 美恵子

教員として二十年、那須のお山の小さな宿の女将として十二年。

土、日もなく仕事を楽しんでおりましたら、今年に入り身体が悲鳴をあげてしまいました。

あまり趣味というものが縁がなかった私にとつて療養休暇を頂いてリハビリを始めましたが、リハビリ以外の時間に何をしても良いか戸惑いながら只々何を考えられるともなく「ポー」と「チ」ちゃんに叱られちゃいますね」の日々を過ごしていた頃のことです。

那須で骨董と着物の店を営んでいらっしゃる私の大好きな梶さん（これまた魅力的な方です）からのご紹介で布詠先生にお逢いすることが出来ました。私のような者もすぐに受け入れて下さった布詠先生。早速その夜に三人で食事を御一緒にさせて頂きました。飾らない優しい笑顔と気配り、楚々とした女性らしさを目の当たりにした喜びで一杯になりとても素敵な出逢いになりました。お酒を頂きながら話もかなり盛り上がり、いつの間にか光栄なことに那須のお弟子さん第一号ということでお稽古をして頂けることになりました。

忙しい先生がご自分の時間を作りお出掛けになっている那須の別荘。そんな大切なお時間を共に過ごさせて頂くことが出来、私は幸せ者でございます。

那須でお稽古を始めてまだ日も浅いにも係わらず先日「美紗の会のつどい」に出演させて頂きました。目のあたりに皆様の唄や三味線の演奏を聴かせて頂き大きな感動で胸が一杯になりました。本当に素敵でした。唄の意味も分からず時代背景はもろろんのこと人間の心情の揺れ動く様、その方の動きや、





やりとりまで表現される皆様。お一人で弾き語りになさることも素晴らしかったです。また、複数の方々が唄と三味線を合わせる演奏にも感動しました。唄だけでも難しいのに同じ時間を共有して創り上げた演奏にも心打たれました。日々の努力の賜物を集大成しての舞台姿。練習量も打ち込む姿勢も足元にも及ばない私なのに初めてお逢いした美紗の会の皆様方から優しいお言葉を掛けて頂き、那須の山猿は木に登るところか天にも昇るほどの気持になりました。暖かい御心遣い、本当に有難うございました。

来年は皆さまにお礼の意味も込めて一層の精進をして参りたいと思っております。新しい年もその一瞬一瞬を大切に生きて行きたいと思えます。まさに新しい挑戦です。今まで生きて来た私に色気は全くありませんでしたが、これからは布詠先生の様に唄と三味線、そして生き方の艶っぽさを目標にしていきたいと思えます。素敵な出逢いに感謝しながら。

### 「良き日」

己紗 克咏

十月十九日神田明神文化交流館で「千壽文 卒寿記念の會」が催された。

お昼過ぎに家を出ると土曜日の、平日より少し緩んだ空気が街を覆っていた。中野駅まで歩き中央線に乗る。それほど混んでいない車内から外の景色を眺めながら「うーん、二日酔いには土曜日が良いなあ。曇りつてのがまた良い。ところどころ薄くなった雲が少し明るくなっているくらい曇りが良い。それも秋が良い。」なんてまだ酒が残って勝手に回り続ける脳で徒然を慰めていると電車は御茶ノ水駅到着。聖橋から湯島聖堂辺りをふらついて神田明神の鳥居をくぐる。あれ？久しぶりの神田明神はちょっと雰囲気違っていた。いつ以来かというところ、なんてことをやっているかと先に進まないのですっ飛ばして、今回の会場である神田明神文化交流館地下一階の会場へ。

さて、受付を済ませ開演を待つ。美紗の会の面々や会でお見かけする方もちらほら。すーっと明かりが落ちて、幕が上がります千壽文先生の「七福神」で会が始まる。地方は布詠師匠。三味線の音で場の空気が変わる。舞台上下手から花柳千壽文が現れる。



日本髪に美しい着物と帯、そしてそれぞれの絵柄のアンサンブル。その立ち居姿に一瞬で気を持っていかれる。いけない、ここで踏ん張って今日の前に見える全てを視なければ、終わるまで気を抜いてはいけない。平面性、水平、線、重さを下方に抜く、着物、帯、足袋、柄、垂直線、中心線、目線、両肩を結ぶ線、腰の線、扇子、扇形、先端、手、指、畳むような、折り紙のような、逆パス…、日本舞踊を観る楽しさは大和絵や浮世絵に通じるものがある。垂直水平を基本にして緊張感のある直線や円弧で構成された平面。もともと水平垂直線が強調されている日本家屋の環境で、平面性を強く持った着物を着て舞う。着物や帯には絵があしらわれている。そんな平面世界の無理やり身体を歪ませて押し込んでいくような、なんとも不自由な芸術であろう。でも、身体のかたちの変化で作り出される直線が舞台全体の作

り出す絵の構成を変えてゆく。その変化と決まった時の鮮やかさが僕にとつての日本舞踊の醍醐味と言える。

とまあ分かったようなことを並べてはみたが、日本舞踊にこんなに心奪われるとは自分自身考えてもみなかった。正直よく分からない芸事の一つだった。それが、美紗の会の発表会で布詠師匠の唄と三味線での千壽文先生の舞を初めて目の前で見た時。舞台ではなくお座敷でそれもかぶりつきで目にした、その時の衝撃。衝撃なんて大袈裟と思われるかもしれないが頭の中は完全にパニック状態であった。「何これ……！すごい張り詰めてる。うわーキレっきれっにキレまくり！えー、えー、あー、今完璧な構成！おいおい体どうなってるの？着物の中どうなってるの？おかしいよ。いやー無理無理、絶対無理、その腰からその角度の肩はないでしょー。で、で、手がそうくる？で、あー扇がー、スワパツと、そーくるか、あーイブクライン級の切れ味。で、またキマツた。目やばー！平行視じゃん。あー完全にビーム出てる！頭の高さ変わらねーし。絶対太ももパンパンだよー、明日筋肉痛……」とこんな感じ。完全に持っていけません。で、先に並べた御託をカジュアルに表現するところなる。

で、會の方に戻ると、その後素晴らしい演目が続く。千壽文先生のお弟子さんの花柳千寿艶さんと花柳千寿鳳。それぞれ「河水」、「夜桜」と「河太郎」を披露。これまたお弟子さんの桂伸三さんの落語と「おてもやん」で休憩。開けて後半が絶品。恥ずかしながら持つてかれました。またまたお弟子さんの千寿艶さんと千寿鳳の登場。「雨の四季」と「島の千歳」を踊られたのですがどちらも二十分以上の演目だったか、その長さを感じさせない素晴らしさ。そして、驚きはお弟子さん三人の踊りのふとした瞬間に千壽文先生

が重なって現れるのです。この頃には完全にイッてます。そして、花柳金吾師の「忘れ唱歌」の後に千壽文先生の「辰巳の左様」「日吉さん」。この頃には椅子に腰掛けていると足の先まで完全に見ることができないので、いちばん後ろの記録用のカメラの横に移動し立ち見。瞬きするのを忘れていたせいか涙が。トリは、きゃー素敵！花柳典幸さま♡の「神田祭」。



最後は神田明神様の居られる神田で締めました。聞くと千壽文先生は青山で生まれ神田に嫁いで来てしばらく暮らしたとのこと。全ての事への心からの感謝の想いが千壽文先生の身の丈で伝えられた素晴らしい會でした。幸せなことに僕は美紗の会で千壽文先生とご一緒する機会に多く恵まれている。身体はそれほど大きくはなく、声もそんなに通る声でもない。でも、踊る時の立ち居姿や丁寧な言葉や大切に扱う唄の深さと味わいは、表すことができないう大きさを持つていらっしやる。それは九十歳を越えても自らを磨いていこうという瑞々しいしさに裏打ちされていることを一緒に稽古することで強く感じる。

その日は會が終わった後すぐに家へ帰った。とても良い一日だったので大切にひとり反芻しようと思っただけだ。お酒を飲みながら「良き日」「良き日」と何度も繰り返した。

## 「江戸の世界へ」

藤弘 夕実

令和に入って間もない秋の日に、友人から地元北海道千歳で行われるという小唄の会に誘われました。そこは、地元で有名な美味しいお寿司のお店。小唄はなじみが薄かったのですが、美味しい料理が食べられるということもあり、学生の時から音楽を続けてきた私を誘って頂いた気持ちも嬉しかったので、参加する事にしました。

九月二十八日、すっかり涼しくなった千歳の町を歩き、会場に到着すると、そこには知っている顔もちらほらあり、いくぶん緊張していた私も少しほっとした気持ちで席に座りました。

まもなく、本日の主役である西松さんが部屋に入っ





宮崎利春

て来られ、その凛とした佇まいに、せつかく影を潜めた緊張がまた持ち上がってくるのを感じました。  
 しかし、その佇まいとはうらはらに、皆さんと気さくにお話をされるのを聞き、なにか難しい伝統芸能的なものを想像していたのが、ちよつと違うのかな、という安心が生まれてきたのでした。  
 そして始まった演奏。三味線の音が部屋に響き、唄声の流れ始めると、そこはもう江戸の色町の世界。遊女が胸に秘めた思いを込めて唄い上げる切なさが心に染み入ってきました。そして、曲が終わると西松さんが、曲の背景などを説明してくれます。

自分でもコンサートをを行う事があり、曲の合間に語り、いわゆるMCというものを挟むのですが、西松さんの語りは、それ自体がひとつの芸となっており、演奏と語り、語りと演奏、すべてが一体化して、始まりから終わりまでが、一つの物語のようになっていて、がつていることに衝撃を受けました。

それは、まるで唄が出来た時代へと私たちを引き込み、現代のこの瞬間までの悠久の流れを感じさせるかのようなものだったのです。

あつという間にすべての演奏が終わり、お料理が運ばれてきました。

すっかり西松さんの音楽の世界に魅せられた私は、ぼーっとした頭のまま、お料理を頂きながら、お話を聞き、ただうなずくばかりでした。

西松さんは、色々な楽器とのジョイントもされていると聞き、ぜひまたの機会に新しい世界へと連れて行って欲しいと願っております。

### 第九回薊の会『初秋の集い』を終えて

己紗 鶴詠

九月八日曜日朝、台風の影響を告げる天気予報の中、美紗の会の皆さんが続々と軽井沢に足を運んで下さいました。開演時間は帰りの電車の運行を考慮し一時間程早めてのスタートとなりました。今回の薊の会は美紗の会の皆さんの親睦とお互いの切磋琢磨を意図した企画内容とさせて頂きましたが、お客様を大勢お呼びしての会とは違い、少しでもリラックスして頂き、お互いの演奏をじっくりと鑑賞し合い日頃の努力の成果を刺激し合う事が出来たとしたら幸いです。

司会進行は福岡こと俊詠さんに無茶振りしてお願い



いしました。皆さんには演奏の前にひと言ずつ感想を述べてもらう事にし、いつもとは違う雰囲気の中で、演奏会は時折笑い聲の聞こえる和やかな雰囲気の中で進行し、台風が接近していることすら忘れてしまうほどでした。今回の薊の会の準備には、照沼こと佳詠さん、俊詠さん、斎藤さん、菊地こと詠扇さんにお忙しい中をお時間を割いて頂き、舞台設営や親睦会の準備など前日よりお手伝いして頂き本当に助かりました。また、当日の朝にも皆さんにお手伝いを頂き準備を整えることが出来ました。

演奏会プログラム第一部は美紗の会お弟子さんの演奏でしたが、特に印象に残った演奏は新しくお弟子さんになられたお二人でした。美紗の会でのお披露目は初めてではありませんが、邦楽の経歴は長い北山さんは軽やかなテンポで「浪花くずし」を唄と糸で演奏されました。さすがベテランの風格を表す堂々とした良く声の通る演奏でした。また、当日は仕事があったにも拘わらず途中から仕事を抜け出し、駆けつけて参加下さった川畑さんの「初めより」「行きに寄ろうか」は美紗の会に入ってから数か月、しかも邦楽は初めてとのことですが、のびやかな良いお声でもとても初めてとは信じがたいお唄でした。

他の皆さんの演奏もそれぞれが日頃の精進の成果を披露していたように思いました。そして今回の注目は、稲生こと悠詠さん、山中こと幸詠さん、照沼こと佳詠さんによる「雨の宿」と「夢の柳橋」の演奏でした。十月十九日に行われる花柳千壽文先生の「卒寿記念の会」で友情出演をされるとあって師匠のご指導にも一層の力が入っており、ご多忙の三人が合同でお稽古するにはお時間のやり繰りを含め相当のご苦労があったことと想像しています。その成果は先日千壽文先生の「卒寿記念の会」演奏会では見事な演奏をされていて感動致しました。また、「御所のお庭」を佳詠さんの地方で舞われた、詠扇こと関崎扇ひでさんは、凜としてキレイのある舞で日々精進されている賜物と心に残りました。

さて、第二部は西松布詠師匠の月を題材にした二題の演奏。小唄「後の月」歌沢「お月さん」。生憎の天気ではありましたが、暫し現実の天気を忘れ、月夜の切ない逢瀬に思いを馳せるしっとりとした演奏でした。そして、最後の演目は「美紗の会」でもお馴染みの西松布詠師匠の地方による千壽文先生の舞踊二題「辰巳の左様」「河太郎」でしたが、千壽文

先生の踊りは今年卒寿を迎える年齢を全く感じさせない、いつもながらの凜とした佇まいの中にある力強い舞い姿には圧倒され、深く感銘致しました。演奏会終了後は僅かな時間ではありましたが小宴を開き皆さんと親睦を図ることが出来ました。第九回「薊の会」は美紗の会の皆さんのご協力を得て無事に終えることが出来ました。悪天候が予想される中を軽井沢までお越し頂いた皆さんに感謝申し上げます。



《今後の予定》

◎三月十四日(土)

人形町 登録有形文化財 よし梅芳町亭  
春の愁いに花添えて

西松布詠 唄と三味線

服部真湖 舞 ゲスト出演

昼の部

(食事付き) 十一時 開場

(鑑賞のみ) 十二時 開場

夜の部 午後一時開場

午後四時開場

五時開演

六時十分 食事

◎四月二十五日(土)

午後十二時半より

赤坂クラブ

第五十九回 美紗の会のつどい

■たより第90号

発行者 美紗の会

編集責任者 照沼 太佳子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松布詠

稽古場 港区白金台三ー二ー二

白金台ブレイス三階

電話 (三四四一)ー二七二六

(五四四七)ー四一一二

E\_mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>

